OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	記憶の政治学と国境を消す苦しみの連帯
Author(s)	金, 文柱
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 31-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

記憶の政治学と国境を消す苦しみの連帯

金 文 柱

1

いま私たちのいる嶺南(ヨンナム)大学校は，韓国の第 5〜9 代（1963 年 2 月〜1979 年 10 月）の大統領であった朴正熙(パクチョンヒ)が，旧大邱(テグ)大学と青邱(チョング)大学を合併して設立した大学です。5.16 軍事クーデタ（1961 年）で権力をにぎった朴正熙は，1967 年 7 月に大統領に再選されたあと，嶺南大学校を設立（12 月）し，大学の「校主」になりました。嶺南大学校の前身である旧大邱大学校は，ノブレス・オブリージュ（Noblesse Oblige）を実践した名門家「慶州・崔氏」をはじめとする（嶺南）地域の儒林たちの寄付と献身による民族大学であり，青丘大学校は勉強に集中できなかった労働者たちのための夜間大学からはじまった市民大学でした。現在，この二つの大学の 20 年の歴史は，嶺南大学校の沿革に何の解説もなく，ただ一行記されているだけです。嶺南大学校は，自分の前身であった二つの大学を出来る限り排除しようとしているのです。

記憶は，アイデンティティの核心です。「私」という存在は記憶の産物であって，多様な経験による多くの記憶とそれに基づいた思惟によって，はじめて「私」は私になります。何を自分の過去から記憶するかは，自己 - アイデンティティを構成する最も重要な作業です。過去の無い現在はあり得ませんし，整理されなかった過去はゾンビのように帰還して存在を揺さぶるでしょう。これは個別の存在だけでなく，共同体にも適用されます。記憶をめぐる格闘は，記憶が終結された過去ではなく，現在に属するものであることを意味し，記憶そのものよりもそれをどのように処理するかが重要な問題であることを示唆します。この点で，保存・貯蔵すること（記）と想起すること（憶）で構成された「記憶」という言葉は，本質的に名詞ではなく動詞であります。

嶺南大学校では，時々戦闘機の騒音のため一息話を止めないといけない時があります。ソウルでは経験できないことが，人口 250 万の居住する韓国第 3 の都市である大邱では頻繁に起こります。韓国の空軍戦闘部隊とアメリカの太平洋空軍の隷下にある第 7 空軍の駐屯する K2 飛行場は，韓国空軍の核心基地の一つです。一日に何回も経験する戦闘機の騒音は，ここが予備戦場であることを想起させる信号ですが，市民たちはその事実を忘れたまま生活しています。韓国の主力戦闘機が離着陸する飛行場があり，近くの星州には

THAAD が配備されていますが，ここの人々は後方だということで安心しているようです。発表を準備しながら読んだテキストの戦場描写は，私にはいま・ここの戦闘機の騒音を連想させましたし，大邱から近い東海岸に立ち並んだ原発ベルトを喚起させました。そして，最近の韓半島をめぐる核 - 脅威の実際性について考えさせました。

この前の冬に学生たちと 1 週間広島に滞在したことから，原爆ははじめて私の思惟の対象になりました。恥ずかしいですが，原爆はそれまで私の関心事ではなかったのです。広島の戦争関連の場所と朝鮮学校を訪問したあと，広島・長崎に落された原爆が東アジアの歴史において非常に重要な結節点であると考えるようになりました。この考えは，広島で聴いた被爆者証言の時よりも，韓国人被爆者の証言を通じてより本格的になりました。広島と長崎に投下された原爆は，韓国人被爆者の観点にたつ時に問題点がより浮彫りになり，国家単位では解決できない東アジアの恐怖と葛藤の歴史を解決できる可能性が模索できると考えます。今回の報告は，これらの問題についての結論ではなく，着手したばかりのところでの思惟の断想程度のものです。

2

日本軍慰安婦問題は，1991 年に金学順（キムハクスン）さんの勇気ある証言から始まり，関連団体の組織など，多くの人の関心を引きながら，韓・日間の最も尖鋭な過去事問題になりました。国際的にも日本の蛮行と歴史認識をあらわす事例になり，日本軍慰安婦問題を象徴的に表現した少女像が，韓国だけではなくアメリカ，カナダ，オーストラリア，中国などに立てられています。ところが，日本軍慰安婦問題とほぼ同じ時期に総動員として行われた強制徴用とそれにつづく被爆者の問題については，韓国の市民団体や政府も積極的に取り組むことは無く，ほとんど個人や民間団体が日本政府や企業を相手として補償問題を進めています。1965 年 6 月に朴正熙政権が調印した韓日基本条約の付属規定「韓日請求権協定」に具体的に提示されていないにもかかわらず，日本政府はこの請求権に属する包括的な戦後補償は終わっているという主張を繰り返しています。日本軍慰安婦の規模は，20 万名にものぼると推算されていますが，そのうち現在 257 名の被害者名簿が公開されている状況です。一方，太平洋戦争期に日本へ動員された朝鮮人労務者の規模は，日本政府の資料によると軍人・軍属（11 万人）を含めて 17 万 4 千人，韓国政府の推算によると約 20 万人になり，現在の貨幣価値で換算した未収金の規模は 4 兆ウォンであると言われています。ところで，韓国人被爆者問題は，強制動員による被害と未収金問題とはちがって，その被害が深刻であると同時に苦しみがあとの世代までもつづく現在の問題であるにもかかわらず，大衆にほとんど知らされていません。解放から 45 年がたってから表面化された戦争関連の被害者たちの苦痛と惨状は，私たちに「国家とは何か」という問題をあらためて考えさせます。これまで韓国人被爆者が経験した苦痛の実態に接近することを妨げた最も大きな存在は韓

国政府であって，それは朴正熙政権が締結した韓日協定から始まります。むろん，その背後には権力と資本の欲望があり，これが現在もこの問題を封印しようとする最も重大な力です。朴正熙政権の功としてあげられる経済発展は，強制動員された慰安婦と戦争関連被害者を含む韓国の近現代史の数多いホモ・サケル（homo sacer）の深くて長い苦痛に基づいたものでした。

1945 年 8 月 15 日は韓国人にとっては光復節ですが，日本人にとっては敗戦の日になります。広島と長崎に落とされた原爆の惨状が韓国人に一つの実態として経験できない理由は，韓国人が原爆を日本の敗戦の決定的な理由と考えるからです。「原爆の経験は惨いが，その惨状が無かったら私たちの苦痛が終わらなかっただろう」と考えるからです。原爆は，韓国人の内面において隅に押しやっておいた情念のパンドラです。その中には苦痛への憐憫とともに，日本にたいする宿怨があります。日本を旅行する韓国人旅行者が 600 万人にのぼっているにもかかわらず，広島と長崎を訪問する人は非常に少なくて，訪問順位の対象にもなっていません。

去年の冬，広島を訪問した何人かの学生は，自分の人生において最も重要な旅行であったと告白しました。広島で，私たちは原爆の惨状を見ました。六日間，広島の戦争関連施設をまわりながら，学生たちはどんなことがあっても戦争はいけないという考えを自然に持つようになりましたし，広島の大学生たちとも毎晩気軽に話し合いました。そして，朝鮮学校では今も続いている朝鮮人差別の経験と遭遇しました。原爆の惨状と接しましたが，日本にたいする複雑な感情は完全には解消されませんでした。このような状態は，私たち皆のためによくないです。

韓国において，被爆者問題が初めて公にされたのは，2002 年に「韓国原爆二世患友会」を組織し，関連法案の制定のために尽力した金亨律（キムヒョンニュル）によってでした。2010 年 8 月には韓国人被爆者の苦痛が放送されましたが，地方放送（大邱 MBC/晋州 KBS）の小さい企画に止まりました。韓国人被爆者の実態は 1970 年代の後半に「韓国教会女性連合会」と「韓国原爆被害者協会」が中心になって初めて整理され，政府による実態調査は 1990 年の盧泰愚（ノテウ）大統領の訪日にあわせて二ヶ月間おこなわれましたが，とてもずさんなものでした。55 年ものあいだ，原爆被害者の問題は，政府から完全に見放されたものでした。その間，被爆者たちを支援したのは日本の市民団体であって，彼らによって韓国人被爆者の治療や支援がおこなわれ，関連内容は具体的な資料として述べられました。この過程はいうまでもなく朝鮮人にたいする日本政府の差別を乗りこえることでしたし，それと同時に韓国人被爆者訴訟の代表的な存在である「孫振斗裁判」のモットーであった「被爆者はどこにいても被爆者である」という事実を確認することでもありました。広島と長崎の原爆被害者は約 70 万人，そのうち朝鮮人被爆者は約 7 万人，死亡者は 4 万人，生きて故国に戻ってきた人は約 2 万 3 千人であると推算されています。被害者全体の死亡率は 33%であるのに対して，韓国人被爆者の死亡率が 60%近くになるのは，朝鮮人たちが爆心地から近いところに集中

していたか，適切な救護が施されなったことを示唆しています。

日本にいる韓国人被爆者数が 6,005 名というかたちで，比較的正確に把握されているのに対して,韓国に帰還した被爆者の実態は現在までちゃんと究明されたことがありません。韓国人被爆者は三重の被害者です。彼らは強制的に連れていかれ，原爆に遭い，長いあいだ見放されました。韓国人被爆者は人類が初めて経験した原爆の真実を究明する核心地帯です。

広島の平和公園は一つ重要なメッセージを伝えています。市民の平和な日常が原爆によって根こそぎ破壊されたこと,原爆がいかに残酷な武器であるかを生々しく顕示すること,これが広島平和公園のメッセージです。ところが，そこには抜けたものがあります。それは最も決定的なものです。それは,「なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか」という点です。これについての省察と反省なしに,広島は決して平和都市になれません。「戦争の都市」としての広島と長崎についての深い反省なしには，平和は語れません。反戦は，記憶を復元し振りかえることから始めなければなりません。

韓国人被爆者の問題はまさに先の問題の地点にあります。韓国人被爆者の問題は,「なぜ彼らがそこにいたのか，そこにいなければならなかったのか」という渡日の背景と理由から始まります。そして，ここが日本人被爆者の問題と分かれるところです。多くの韓国人は原爆の被害が自分たちとは無関係なものであると考えています。それは原爆の実態と歴史についての無知によるものではありますが，本質的には原爆を日帝の蛮行にたいする戒め - 処罰の観点から認識するからです。この点を直視しないと，広島と長崎から得られる平和の教訓はあまりありません。韓国人被爆者の実態が明らかにされなかったのは，被害者側からの積極的な問題提起が足りなかったからでもあります。韓国人被爆者はかれらの苦痛を自ら語れなかったサバルタン（Subaltern）であり，ここが日本軍慰安婦被害者との差が生じるところです。原爆被害者は病気のためまともに働くこともできなかったし，差別への恐怖のために積極的に名乗り出ることができませんでした。差別と排除の中心に韓国人被爆者の過去と苦痛が横たわっています。ここで注意ぶかくみるべき点は，日本軍慰安婦の被害者たちは韓国の市民団体とともに二つの国にたいして真の過去事清算を要請したのに対して，原爆被害者の場合は日本の市民団体とともに日本政府を相手として支援と治療の問題を解決しようとしたという事実です。これは注目すべきところです。

3

韓国人被爆者の問題を素材とした韓国文学は非常に少ないです。私の寡聞によるのかもしれませんが，原爆被害者問題を扱った作品は，韓水山（ハン ス サン）の『軍艦島』（2016 年）と高炯烈（コ ヒョンヨル）の長編詩「リトルボーイ」（1995 年）程度です。韓水山の『軍艦島』を原作とした映画「軍艦島」が制作され，徴用者問題についての大衆的な関心を牽引はしたものの，かなり厳しい

批判も受けました。高炯烈の長編詩は，評論界の注目がほとんどありませんでした。恥ずかしいですが，私もこの二作品を知りませんでした。韓国文学は韓国人被爆者問題についてほとんど関心を向けなかったのです。

1946 年に江原道の麟蹄で生まれた韓水山は，春川高等学校を卒業し，1967 年に『江原日報』の新春文芸賞に詩が当選したあと，本格的に文学を勉強するため慶喜（キョンヒ）大学校の国文学科に入学します。1972 年に小説「四月の終わり」が『東亜日報』の新春文芸に当選してからは,時間のなかに消滅されていた存在を感覚的な文体で形象化することに専念しました。かれが作家としての立場を固めたのは，旅芝居の役者たちの哀歓をえがいた『浮草』（1976 年）です。この作品によって 1977 年に現代作家賞を受賞した韓水山は，いくつかの新聞に小説を連載しながら大衆作家の道を歩みます。そして，1981 年の春,『中央日報』に連載していた「欲望の街」の一部内容が政府官僚と軍人を否定的に描いたという理由で，安企部（国家安全企画部）でひどい拷問をうけたことから，人生の重要な転換点をむかえます。何人かの文学者とともに連累された筆禍事件を経験してから 1988 年に日本に渡った韓水山は，1989 年に東京のある本屋で『原爆と朝鮮人』に出会い，その後岡正治牧師と「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」のメンバーたちとともに軍艦島を取材することになります。そして，岡正治牧師の軍艦島の死亡者関連資料に基づいて「日はのぼり，日はしずみ」というタイトルの長編を 1993 年から『中央日報』に連載します。3 年間の連載が惨憺たる失敗に終わったあと,前作のほとんどの内容を棄てながら同じ題材をあつかった長編小説『烏』（全 5 巻）を完成し，さらに 3 分の 1 に縮約した日本語版『軍艦島』（2009 年）と韓国語版『軍艦島』（2016 年）を刊行しました。

小説は，軍艦島に連れてこられた人物たちの過去と軍艦島における生活を並置する方法で，強制徴用者たちの人生を形象化しました。島を脱出するための朝鮮人徴用者（応徴士）たちの謀議とかれらの運命の曲折,そして島のさまざまな人物間の関係を描いていますが,その末尾の部分で軍艦島を脱出した人々が長崎で生活しながら経験する原爆体験を描いたことで，強制徴用から被爆にいたる幅広い叙事になっています。この小説は，軍艦島にたいする詳細な取材と岡正治牧師から渡された軍艦島死亡者の死亡診断書や火葬認許証下附申請書といった資料に想像力を加えて構成したフィクションであり，作家が卒業した春川高校でおきた事件（常緑会事件）に関わった人物たちを背景とする叙事ラインも投影されています。

実際，この作品は，多くの人物が登場し，彼らの人生の曲折が描かれてはいるものの，人物間の関係の描写が散漫であるため，プロットの力が弱く，叙事が向かおうとする当時の真実をまともに描けていません。全体的には，歴史的な実態としての軍艦島が一つの素材として扱われているにすぎないように見えます。軍艦島をめぐる歴史的な真実ではなく，当時の典型的な人物群を軍艦島の事件に配置したかたちになっています。映画「軍艦島」に向けられた批判は，映画の問題であるより原作の問題であったのです。

この小説に登場している重要人物は，親日派の二世としての苦悩を示す尹知相(ユンヂサン)，「不穏な読書会」とされた常緑会の一員であった崔又碩(チェウソク)，崔を愛する慰安婦の錦禾(クムファ)，尹知相の妻として忍耐の人生を生きる崔書蛍(チェソヒョン)，軍艦島からの脱出に失敗して酷い拷問を受ける時，日本人巡査に重症を負わせ収監される張泰福(チャンテボク)，端島炭坑の労働運動と施設破壊の先頭にたつ申チョルと趙承道(チョスンド)，早く日本に定着して工事を請負い朝鮮人たちを雇うことで富を積んだ「六本指」，そして強制動員された朝鮮人たちに善意をほどこすヤスコ，イシカワ，江上老人と娘夫婦などです。

このような人物達をつうじて，作家はその時代を構成した人間群像を描いているわけですが，問題はこのような形象が軍艦島で象徴される強制動員の実態をさえぎっているということです。作家が描いているのは，強い欲望と善意です。前者は強制動員された朝鮮人たちの脱出への欲望や同族から利益を得ようとする親日派・朝鮮人業者の欲望であり，後者は惨憺たる現実のなかでも友情と義理を交換する人々の姿や朝鮮人にさまざまな善意をほどこす日本人の善良さです。作品はまるで泥から咲く蓮の花の美しさを読者に経験させようとするように思われます。映画「軍艦島」についての批判は，このような作家の意図に対する不快感に起因すると判断されます。最初の「朝鮮人はー」というセリフに含まれている日本人の視線を内面化した人物達の発言，朝鮮人に同情し彼らに善意をほどこす日本人たちの形象は，どこから来たのでしょうか。韓水山の『軍艦島』が日本で先に出版された現実をあらためて振り返らせるところです。

4

1995 年に出版された高炯烈の長編詩『リトルボーイ』は，原爆の問題を民衆的・民族的・文明批判的な観点から総体的に描いています。語り手である少年金中輝(キムヂュンフイ)と，広島の三菱造船所に派遣された朝鮮青年同盟員の李玉長(イオクチャン)の視線を交差させるなかで描かれている強制動員と原爆の惨状は，叙事と関連する具体的な事実をもとにして，原爆をめぐる事態の真実に肉薄しています。我々はこの作品をつうじて，原爆に関連する客観的な事実を知らされるだけではなく，それがどれほど恐ろしくて惨憺たることなのかを生々しく経験することができます。

> 彼等の苦痛が何故／我等の苦痛にならねばならぬのか。／戦争は終わり，彼等は追われるように／朝鮮に帰ってきたが，／彼等の苦痛はその時から始まった。／／その苦痛は日本の内部を通って／あの小さな爆弾，／リトルボーイからやってきた。／アメリカ合衆国からやってきた（高炯烈〔韓成禮訳〕『長詩 リトルボーイ』コールサック社，2006 年，17 頁。以下，『リトルボーイ』からの引用は，既刊の日本語訳による）。

「序章」にあたるこの部分は，朝鮮人の被爆被害の核心を非常に明確に問い詰めています。「彼等の苦痛が何故／我等の苦痛にならねばならぬのか」，この苦痛の絶叫こそ，朝鮮人被爆問題の核心的な言明です。その苦痛が「日本の内部を通って」，「アメリカ合衆国から」きたという点は，韓半島の現代史の桎梏をつらぬくものです。この問題について何の清算作業も無いまま，依然として韓国・日本・アメリカは東アジアの盟邦であります。

高炯烈の詩は，日帝期にあった朝鮮民族の惨状だけではなく，日本の地で日本の支配階級と米軍のため経験した（朝鮮）民衆の受難を克明に記すことを通して，戦争の実態について問い返しています。このような叙述方向は，社会主義・独立運動組織の朝鮮青年同盟員である李玉長をもう一人の語り手として設けている，この詩の戦略からも確認できます。さらに，民衆と民族の観点にたつこの詩は，原爆の文明史的な意味をも加えてあります。

> 私を作った父よ，／私を載せて太平洋に行かせた父よ，／目の悪い巨体の父よ，／めがねをかけても微かな光だけ／見える父よ，／広島に私を持っていかせた父よ，／これを，どうなさるおつもりか。／（中略）／どうして私を悪魔の子供に作ったのか（142-143 頁）。

この詩は，「リトルボーイ」を魔王（pluto）の子と命名しながら，文明のなかの悪魔的なもの，すべての生命を破壊する文明の無知と闇を，激しい嘆息とともに繰りかえし批判します。この原爆こそ近代文明の子であること，それは反生命的な文明にたいする強烈な拒否です。「リトルボーイ」のこのような自己否定の声は，原爆による人類の惨状とその悲劇性を生々しく描き出します。

> 小半日待って捕まえた日本のひばり，／数万年も日本の山の麓で卵を産んで繁殖し／青い空を飛んでおとなになり／またつがいになって卵を産み，卵を抱いて，／自分のもう一つの命を孵化してきた美しい／広島の海辺のひばり／（中略）／坊や，その鳥を放してやりなさい，神様が育ててる鳥を，／誰もその鳥を捕まえてはいけないのよ。／（中略）／「あなた，あの子チョーセンジンの子みたいよ。／言うことを聞かないわ」と言う声が／走っていく私の背後から刺すように聞こえてきた。／（中略）／熱い日差しが目の中に入って来た。その瞬間／ふとひばりを殺してやりたくなった。／石を持ち，ひばりの頭を／下に敷いた石に当てて打ち下ろした。／頭の骨が砕ける音がした。／尾と細長い脚を少し震わせ／やがて翼が垂れて頭を垂れた（33-34 頁）。

日本人から差別と恥辱を経験した語り手の少年の金中輝が，半日を待ち伏せて捕まえた「日本のヒバリ」を残酷に殺すこの部分は，差別と嫌悪がどのように伝染され，それが如何に恐ろしいものであるかを実感できるように形象化されています。日本の地で育てられ

たという理由だけで投射される少年の憎悪の感情と復讐の行為は，ロマンチックな人間主義と普遍的な人間愛では解消しきれない，ある種の宿怨を思い浮かばせます。平和は，どこから来るのか。この怒りと嫌悪の感情を治癒しないで，平和はたたして臨在することができるのでしょうか。

> 彼らはほとんど裸だった。／女は胸を見て分かったし／男は性器を見て分かったが／男や女は皆，日焼けした犬のように／真っ黒な裸をしていた。／（中略）／そこでは日本人，朝鮮人の／区分がなかった。／泣き叫ぶことだけが彼らを一つにした。／地獄の町だった。／／生きて飛び跳ねながらあちこち／夫や子を切なく探す女も／廃墟になった道で口が裂けるほど／母を呼ぶ子供も／死んですでに黒く変色してしまった死者も／皆裸だった（171 頁）。

原爆投下のあと，詩の語り手たちが広島の廃墟をあてどなく歩く場面は，地上の全てを消した原爆の残酷さを，ほかのどの描写よりも生々しく描いています。あてもなくどこかに向かって歩く人々の錯乱した姿から，私たちは地獄の風景を目撃するようになります。そのようななかで，語り手の視線に捉えられた残酷な死体の姿，すべての境界を消してしまった地獄の形象，男も女も「日焼けした犬のように／真っ黒」くなってしまった裸，「日本人，朝鮮人の／区分がな」いこの日の形象は，我々に苦痛と死が伝える格別な意味を喚起します。

エマニュエル・レヴィナスは，苦痛と死の顔こそ私の理念と自由を回収する倫理的な事件であると規定しました。我々は死の前で，その苦痛の顔の前で，無限の責任を負わされた奴隷達であるということです。それが苦痛と死が人間に伝える意味でしょう。

原爆被害者の問題は，長い時間の宿怨が横たわっている韓国と日本が，国家的な境界を消してお互いに接続できる，非常に重要な歴史的事案です。これはある特定の世代に止まることなく，代々受け継がれる終りのない苦痛である点で重大な問題であると同時に，戦争の根元を振り返らせるものでもあるという意味で，反戦と平和の拠点にもなりえます。憎悪の感情を越えて，韓国と日本が生産的に出会える道，そして一度もまともに問い詰められてこなかったアメリカの問題を，我々は原爆被害者の問題から導き出せるでしょう。